

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：34416

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21652033

研究課題名（和文）

近代ヨーロッパ文学における「人種」問題の研究—EU型多文化共生論への寄与

研究課題名（英文）

Study of race and racial issues in modern european literature ---- Contribution to a historical understanding of the EU-multicultural society

研究代表者

柏木 治 (KASHIWAGI OSAMU)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：10214298

研究成果の概要（和文）：

本研究では当初の目的に沿って、フランスを中心とする近代ヨーロッパ文学およびその周辺テキストを、「人種」をキーワードとして読み解き、初期人類学や博物学などの「学」が成立していく過程で、「人種」概念がどのように「科学的」ディスクールとして編み込まれていくかを検証した。また、そうした「人種」概念が、実際に「黒人」や「東方」といった他者表象にどのような影響を与えたかについて論考を加えた。さらに植民地における人種混淆の問題、「人間観察家協会」やその他の科学者団体の文化的位置、それらと文学者の関係についても基礎的な研究を行った。

研究成果の概要（英文）：

According to our investigation program consisting of rereading theoretical works of natural history and anthropological thoughts published in the 18th and 19th century, we clarified the process of formation of the concept of “race” with a scientific status, and its cultural repercussions on the representation of “Black” and “Orient” in French literary works in the 19th century.

We also made a basic study of the “philomatic societies” such as “Société des Observateurs de l’homme” (high-level multidisciplinary scientific and philosophical society), in order to examine their relationship with the development of colonial ideologies.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	500,000	0	500,000
2010年度	800,000	0	800,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	120,000	1,820,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：19世紀フランス文学 人種論 初期人類学 オリエンタリズム 植民地イデオロギー 骨相学 黒人表象 東方通詞

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が加速し、「共生」があたかも時代のキーワードであるかのように叫ばれるなか、異文化間での相互理解や多様な文化の共存は、達成に向かうどころかむしろその基盤の脆弱さを露呈しつつある。これはEUにおいても同様で、国家を越えた理想的な共同体を標榜する理念とは裏腹に、民族・人種間での文化的対立や軋轢は時を経るにしたがって目立つようになった。局所的には紛争を起す事態にさえなっており、EUといえども多文化の共存がいかに難しいものであるかを物語っている。

本研究は、今日のEUが抱えるこうした問題のうち、とくに移民やマイノリティなどの文化的対立を考えるための基礎研究の一つとして構想された。ヨーロッパ文学研究に「共生」の観点を持ち込み、文明的衝突と共生への志向が文学においてどのように表象されてきたかを探ることによって、紛争や対立の背後にある文化構造を明らかにしようとするものである。具体的には、文学テキストを「対立」と「共生」の視点から読み直し、18世紀以降、異文化間の対立や衝突の表象がどのように形成されてきたのかを歴史的に考察することを課題とした。

これまででも文学研究のなかに、オリエンタリズム批判やポスト=コロニアリズムの流れをくむ批評として、こうした文化的対立を抉り出すものはあった。しかしながら、「科学」としての「人種」や「民族」といった概念がどのように形成されてきたのか、それが同時代の文学テキストにどのような影響関係をもつのか、また、文学という地平で、たとえば「他者」としての「トルコ」（オスマン帝国）はどのように表象されてきたのか、といった具体的で実証的な検討がはじまったのはごく最近である。国民国家の発達と植民地主義の伸張に歩調をあわせるように「人種」の「科学的」概念を膨張させてきた西洋社会は、第二次世界大戦を境に「人種」という用語自体が差別的なコノテーションをもつようになるなか、あらゆる領域でこれを遠ざけるようになり、結果として18世紀から19世紀における「人種」概念に関する研究が十分なされてこなかったからである。近年、ようやくツヴェタン・トドロフ、クロード・ブランケール、サルガ・ムサらによって「人種」や人種問題のいわば考古学的解明が緒についたばかりであり、実証的な総合的研究が待たれていた。

2. 研究の目的

本研究は、「共生」の実現を阻害する要因を歴史文化的な次元から解明しようとするものであり、18世紀後半から第二次世界大戦までのフランス語圏の文学テキスト（補完的にドイツ語圏のそれを含む）を主たる資料体とし、そこにあらわれた「人種」観と「文化」のかかわりを探ることを目的とした。

具体的に設定した課題は、以下の2点である。

(1) 近代的な意味での「人種」概念の成立およびその19世紀的展開と第二次世界大戦下の人種政策にいたるまでの人種理論の再検討。

デュフォン、モンテスキュー、ヴォルテール、ゴビノー、ルナンらの所論や、ドイツのフォルスターからナチスにいたる人種論、さらにラーヴァターの観相学、ガルヤポール・ブロカの骨相学にみられる人種観も含めて検討することを目標とした。

(2) 「人種」にまつわる感性的側面の研究。

文学テキストを中心に「人種」にかかわる記述を調査し、人種的差異に対するそれぞれの作家の情動的反応や心理的態度を分析することで、「人種」がどのような感性をヨーロッパ人に植えつけてきたかを究明しようとするものである。主として18、19世紀にかけてフランスで数多く産み出された旅行記のテキスト（部分的にカール・マイの『オリエンタ旅行物語』のようなドイツのテキストも含まれる）を検討の対象とした。

このなかでとくに焦点化されたのは、形成されていく「人種」観念が、どのような「黒人」および「トルコ」といった他者表象をつくりだしていくかという点である。

3. 研究の方法

研究方法としては、基本的に文献学的調査とテキスト分析を中心とした。対象となった文献は、直接「人種」論にかかわる理論的著作、旅行記を中心とする文学作品である。黒人や東洋人を描いた図像や美術資料も補足的に活用した。

(1) まず、順序として理論的文献を蒐集し、その読解をとおして「人種」理論の「科学化」の道程を跡づけた。具体的には、「人種」race という語の語義変遷、デュフォン、ブルーメンバッハなどの博物学・分類学的な理論形成過程が検討され、モンテスキューやヴォルテールなどの政治・文化的なディスクール、カンパー、キュヴィエ、ガル、

ブロカなどの解剖学・骨相学的な論説が分析された。

(2) つぎに、それが文学的著作にどのように反映しているかを検証するために、ヴォルネー『シリア・エジプト紀行』、シャトーブリアンの『パリからエルサレムへの旅程』、さらにはラマルチヌやネルヴァルの『東方紀行』などの紀行文学テキストを分析し、そこにあらわれるエキゾティシズムとナショナリズムの関係を精査しつつ、とくに「トルコ」と「黒人」のイメージ（表象）を抽出して調査した。さらに同時代の美術作品にも目を配って比較検討を試みた。

(3) これと並行して、現在EU圏での移民やマイノリティの問題の実情を知るために、フィールドワークとして現地聴き取り調査（インタビュー）やビデオ資料の収集にあたった。これは、文献による歴史的研究と今日の問題とを意識的に結びつける目的でなされたものである。

4. 研究成果

(1) フランス語およびドイツ語圏における「人種」論についての基本的な文献、人種論の発達に深く関係した初期人類学の成立過程にかかわる資料を集中的に蒐集することができた。また、19世紀において人種分類にも大いに活用されたF. J. ガルからP. ブロカにいたる骨相学の系譜についてもかなりの資料をそろえた。この分野は人文学ではいまだにほとんど研究されていない。

(2) これらの文献の読解を通して明らかになったのは、18世紀半ば以降、人種論がしだいに「科学的」ディスクールへと変換されていくなかで、骨相学や人類学といった新しい「科学」が生みだされ、19世紀になると、そのもとに少なからぬ科学者集団（sociétés philomatiques）が誕生してくること、そしてこれらの集団には同時代の多くの知識人が関与し、結果として当時の政治やイデオロギーの形成とも無視できない関係を結んでいた、という点である。とくに初期人類学の誕生との関係のなかで人種理論をとらえなおす意図のもと、19世紀初頭に存在した「人間観察家協会」Société des Observateurs de l'homme に焦点をあて、この団体が18世紀の啓蒙主義的ヒューマニズムと植民地主義イデオロギーのあいだに位置することを明確にした（柏木治、『人間観察家協会』と初期人間学的まなざし、『関西大学東西学術研究所創立六十周年記念論文集』所収）。

また、19世紀前半期における骨相学の特異

な流行についても、その時代の文化的コンテキストとあわせて再検討した（柏木治、『文化イデオロギーのなかのphrénologie (1) — フランス王政復古期から七月王政へ』、『文學論集』所収）。

(3) さらに、人種に対する科学的関心が、植民地での血の混淆、すなわち婚姻問題に影響している点についても検証した。これはジェンダー問題とも深く関わる事象で、『ヨーロッパ・ジェンダー文化論—女神信仰・社会風俗・結婚観の軌跡』（柏木治、浜本隆志他編、明石書店）はその成果のひとつである。このなかで研究代表者は、とくに17～18世紀のフランス植民地における異人種婚（および同棲）に光をあてるとともに、人種混淆の表象とその社会的影響について、また、人種階梯に関する「科学的」イデオロギーと男女間の序列的位置づけとの相関性について、それぞれ明らかにした。また研究分担者は、ヨーロッパ内部でのさまざまな女性の表象分析をとおして、近代における「他者」へのまなざしの基本的な構造を明らかにしようとした。

(4) 一方、こうした科学的ディスクールが具体的に文学テキストのなかでどのような影響を及ぼしているかについては、資料が膨大であるために、その成果が十分に具体化されたとは言えないが、いくつかのことが明らかになりつつある。

まずイスラーム世界との関係については、研究実施計画に挙げていたヨーロッパにおける「他者」としての「トルコ」の表象を追いつつ、モンテスキュー以降の「東洋的専制」にまつわるさまざまな言説を再検討した。その過程で、オスマン帝国内で通訳として活動した一群の人びと（東方通詞）、さらにはそうした人材を養成する機関（「言語少年学校」）にあらたに光をあてることができた（柏木治、『言語少年』と東方通詞、『仏語仏文学』所収）。これはこれまであまり言及されてこなかった領域で、少なくとも日本ではまったくとっていいほど研究された形跡がない。

もうひとつの表象分析の対象であった「黒人」のイメージについても、資料収集と読解といった基礎作業に追われて具体的な成果を提示するには至っていないが、16世紀以来、ヨーロッパにおける黒人に対する「まなざし」がどのような変遷をたどってきたか、とくに18世紀後半以降、植民地イデオロギーの形成と奴隷制廃止運動が同時進行していくなかで、黒人表象がどのように変化していくかについて、今後の研究にむけての基本的枠

組をつくることができた。

(5) 最後に、ここ数年来定期的に実施してきた現地調査からは、前述の歴史的な文献研究とは位相を異にするとはいえ、同じ問題意識の延長にあるアクチュアルなEUの諸問題に迫ることができた。研究分担者が中心となった『最新ドイツ事情を知るための50章』（浜本隆志他編、明石書店）、『ドイツのマイノリティ』（同）、「ドイツにおける移民問題」（浜本隆志、口頭発表）はその成果の一端である。

過去三年間の研究を総括すると、大略以上のようになるが、これまでの研究成果にいちおうの「まとめ」をつける意味で、1. 初期人間学と人種論の展開、2. 世界の読解と科学的ディスカール、3. 文学テキストにみるエキゾティシズムとゼノフォビア（外国人嫌悪）、4. EUへのパースペクティブとパラドクス、という論点を軸に近々書物にまとめ、刊行したいと考えている。

なお、今期の研究で形ある成果として示せなかったテーマ、すなわち文学テキストにおける「トルコ」および「黒人」（奴隷を含む）の表象については、今後さらに研究を継続していくとともに、東方世界との仲介になった「東方通詞」に関しても、あらたな研究体制を組みたいと考えている。本研究は「挑戦的萌芽研究」であり、今後の研究にむけていくつかの新しい出発点を見いだすことができたことは意義深いといえるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

① 柏木治、「言語少年」と東方通詞、仏語仏文学、関西大学フランス語フランス文学会、査読有、第38号、2012、pp. 1-23

② 柏木治、「人間観察家協会」と初期人間学的まなざし、関西大学東西学術研究所創立六十周年記念論文集（関西大学出版部、単行本）、関西大学東西学術研究所、査読無、2011、pp. 33-50

③ 浜本隆志、日本のナマハゲとヨーロッパのクランクス、関西大学東西学術研究所創立六十周年記念論文集（関西大学出版部、単行本）、関西大学東西学術研究所、査読無、2011、pp. 223-246

④ 柏木治、文化イデオロギーのなかの phrénologie (1) — フランス王政復古期から

七月王政へ、文學論集、関西大学文学会、査読無、第60巻第3号、2010、pp. 61-79

〔学会発表〕（計3件）

① 浜本隆志、ドイツにおける移民問題、関西大学東西学術研究所、2011年12月17日、関西大学

② 浜本隆志、魔女の虚像と実像、Klub Zukunft と大阪日独協会、2010年7月28日、大阪日独協会

〔図書〕（計7件）

① 柏木治（共編著訳）、関西大学出版部、文化の翻訳「聖像画」における中国同化のみちすじ、2012、pp. 9-304

② 浜本隆志（共編著）、関西大学出版部、EUと日本学、2012、pp. 29-67

③ 浜本隆志、筑摩書房、「窓」の思想史、2011、270 p.

④ 柏木治、浜本隆志（共編著）、明石書店、ヨーロッパ・ジェンダー文化論—女神信仰・社会風俗・結婚観の軌跡、2011、pp. 9-18, 58-141, 188-229, 269-281

⑤ 浜本隆志（編著）、関西大学出版部、異界が口を開けるとき、2010、pp. 1-63, 95-116, 173-191, 255-265

⑥ 浜本隆志（共編著）、明石書店、ドイツのマイノリティ、2010、pp. 3-68

⑦ 浜本隆志（共著）、明石書店、最新ドイツ事情を知るための50章、2009、pp. 3-9, 20-47, 52-59, 70-79, 90-100, 124-132, 136-150, 180-184, 213-221, 236-240, 251-255, 260-266, 280-287, 303-305

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柏木 治 (KASHIWAGI OSAMU)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：10214298

(2) 研究分担者

浜本 隆志 (HAMAMOTO TAKASHI)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：40103387

(3) 連携研究者

()
研究者番号：